

Case.07
子ども食堂

地域課題探求型教育

子ども食堂と連携し、社会課題の解決法を考える



▲すみれ学級は小中学生が誰でも利用でき、月～土曜まで毎日(小学生は月・水・金曜)提供する夕食は無料。学生と一緒に「いただきます！」 ▲夕食前に学習支援を行う。中央で見守っているのが石井教授

広く見ながら、寄り添って見ることで「自分ごと」となる

子どもの貧困問題を解消する目的で、各地に「子ども食堂」が増えている。子どもの貧困とは、単に経済的な貧しさだけを言うのではなく、栄養バランスの良い食事ができない、教育・体験の機会を得られない、孤食であるなど、子どもがさまざまな面において平均的水準より不利な状態にあることを言う。経済学部の石井まこと教授は、こうした社会問題を通じて学生たちの考える力や解決力を養おうと、子ども食堂と連携したゼミを経済学部の数名の教員と展開。経済学部の1～2年生が参加している。

連携先は、大学近隣の数戸西町にある「すみれ学級1組(数戸教室)」である。きっかけは2016年。選挙権年齢が引き下げられたこの年、経済学部が大分合同新聞社と協働で18歳選挙権を考えるプロジェクトを進めていた。石井教授は、「政治についてどう考えているか?と学生にいきなり聞いてもイメージが湧かないと思いました。それよりも身近で起こっている問題に触れ、等身大で関わってもらうことにしたんです」と経緯を語る。このタイミングが偶然にもすみれ学級の立ち上げと重なり、連携を始めることになったのだ。

すみれ学級は発足以来、大分県内7カ所に子ども食堂を開設。それぞれ活動内容は違うが、数戸教室では小学生には週3回の夕食(中学生は月～土曜まで毎日)と、大分大学の学生による学習指導を提供している。

といっても学生は最初からその手伝いに行くわけではなく、ゼミはアイデアソン形式(※)で進められる。まず、約30名の学生が4名1組のグループになり、子ども食堂が存在する原因を考えることからスタート。次に、各地で異なるサービス内容を調査。さらに、自分たちが小中学生だった頃との違いに目を向け、その背景にある社会問題を理解していく。ここまで考察したら、初めて数戸教室を訪問。「貧困」という言葉に身構えていた学生たちは、元気いっぱいの子どもの姿に拍子抜け

するらしい。現実に触れたここからが学生たちの腕の見せどころ。自分たちの持つアイデアやスキルを駆使して、「もっと楽しい居場所にするにはどんな取り組みが必要か」を企画していくのだ。最後は、それをグループごとにプレゼンテーション。中には実現される案もあるという。さらに活動を継続したい学生は、数戸教室でアルバイトの学習支援員として携わっている。教育は、子どもの貧困を解消するために大切なことのひとつ。数戸教室では「志望校への合格率が高い」という評価も生まれている。

「社会問題を理解するには、広く見ながら、寄り添って見るという視点が必要。子どもの貧困という問題が、子ども食堂という場所を通じてリアルに捉えられるように。その解決策を考えてもらう時、私が大切にしているのは、学生自身が本当にやりたいと思い、なおかつ意味が明確なアイデアを引き出すこと。そうすることで自ら学び取ったという感覚をもってほしいのです」

子ども食堂を通じて、親の貧困、社会の貧困、そして食べ物や環境にまで視点が広がっていくことに期待しているという石井教授。「いちばんの敵は、無関心です」。

※アイデアソン=特定のテーマについてグループでアイデアを出し合い、結果を競う手法



▲小学生の宿題をサポート。中学生には月～土曜まで毎日、学習塾としての機能も果たしている